

《2》座談会..「横浜における

ゆるやかなつながり」の可能性

○横山 横浜市は、平成22年

12月に策定した「中期4か年計画」の中で、「つながるしあわせ」という基本理念を掲げました。この「つながり」とは、人と人とのつながりや地域のつながりにより安心を確保していくことと、ビジネス、文化観光、国際交流など様々なつながりによる相乗効果で街を活性化していくという意味合いを含んでいます。本日は、人と人とのつながりや地域のつながりに関連して、ご議論いただきたいと思っています。

高齢化の進展、生涯未婚率の上昇、あるいは離婚などにより、今後、単身世帯の割合が増えていくと言われています。問題を抱えたご家族がそれを解決できずに次の世代も同様の問題を抱える、いわゆる「負の連鎖」も、社会的課題として指摘されています。子どもが成長し社会化していく過程で、人と人との関係を構築する力を得られないまま大人になつていく状況も見られます。こうしたことから、今後増えるであろう「社会的孤立」を

いかに防いでいくかが、大きな課題であると認識しています。

それを紐解いていくための一つのアプローチとして、ここ大都市横浜において、参加や離脱のハードルの低い「ゆるやかなつながり」、言わば都市型の関係性の構築が、「社会的孤立」や「無縁社会化」を防ぐ手掛かりになるのではないかと考えています。本日は、特集の導入部分として、現在の横浜市の実態を踏まえながら「ゆるやかなつながり」を考えるヒントを得られればということとで座談会を企画しました。

はじめに、現在力を入れていらっしゃるのとあわせ、自己紹介をお願いします。

人はつながりの中で行動を選択する

○岩室 ここ20年ほど泌尿器科の医者としてHIV/AIDSの患者を診る一方で公衆衛生医として予防啓発活動を行っています。HIVの感染予防は、セックスをしない、検査を受ける、コンドームを使うと、非常

にシンプルですが、それが容易ではないから感染拡大が続いています。結局感染した人にとっても他人事で、自分だけは大丈夫だと思つています。他人事意識はすべてのことに共通の、一番難しい越えにくいハードルです。そこに取り組むのが公衆衛生、予防医学です。患者を治すというのを使命と思つて医者になりましたが、今では医者としての診療、診察をしているのは週1日だけです。

その私が公衆衛生の仕事をしたが、12キロほど太りまじった。理屈の上ではやせるのは簡単です。飲み過ぎない、食べ過ぎない、運動すると。それがずっとできなかったのです。ある時、旧知だった、育児休業から復帰した保健師さんが私の顔を久しぶりに見て、「先生、顔変わりましたか」、「醜くなりましたか」という雰囲気の良い言葉をかけてくれたのです。それをきっかけに半年で12キロやせました。

つまり私は方法論は持つていたのですが、それを後押ししてくれる環境、つながりがそれ

までの私になかった。これは大きな気づきで、偉そうに健康づくりについて正論を語ってきたけれども、自分自身ができていなかった。それ以来、人間というのは、人とのつながりの中でしか行動を選択できないし、実践できないということ、特に若者、思春期の子どもたち向けに話をするようになってきました。

震災では、発災から10日ほどたったときに、以前私を陸前高田市に講演に呼んでくれた男性保健師に電話したら、保健師の9人中6人が流されたと言った。それで今、月に一度、一泊二日で現地に入っています。彼が連れてきた岩室というだけで地元の人たちからの信頼感が絶大なのです。そういう場面こそ、正に「ゆるやかなつながり」というようなことが大事だと実感しています。

つながりで作る「疑似家庭」

○中野 瀬谷区でワーカーズわくわくというグループを組んで、今年の3月で満20年にな

プロフィール

岩室 紳也

公益社団法人地域医療振興協会ヘルスマネジメント研究センターセンター長
(横浜市子ども・若者支援協議会思春期健全育成部会長)



ります。もともと瀬谷区に住んでいるただの主婦でした。今もそうです。主婦として、生活の面からお困り事を共有して助け合えたらいいと思います。それは一方が一方的に助けるのではなく、助けられたり助けたりという地域の中で暮らしながら支え合うような活動です。

続けているうちに、専門的なことを知らないし手助けも的外れだったりすると気づいて、後からノウハウを身につけていきました。ヘルパー2級を取ろうとか、ケアマネージャーを取ろうということもありましたし、困っている人をひとりぼっちにさせずに行政の窓口にお願いく行く中で「ああ、こういうときはこういう手法があるんだ」と学びつつ、人助けをしてきました。

暮らしの中で悩んでいるときに力になるのは身内ということもあるでしょう。ただ、昔は大家族で身内の力が強かったのですが、今は弱まっているから、「疑似家庭」というのでしようか、地域の力だと思いたいが、地域にいるいろいろな人たちをつないできました。

最近では、ひとりで言う「在宅ホスピス」という形だと思えますが、この町で最期を迎えたいという人に、ホームヘルパーやドクター、訪問看護ステーションなどと協力して、たとえ

ひとり暮らしで身寄りがなくとも、おうちで死にたいとおっしゃるなら何としてでも支えましようというところで、それができるような環境を作っています。

そのほかに、不謹慎な表現ですが「なんちゃって実家」ということに取り組んでいます。

血縁による実家機能が衰えているなら、地域で実家機能を果たしてもいいのではないかとずっと思っていました。今、「わくわく竹村の丘」(図1)という、縁側だらけのなつかしい雰囲気のおうちで、周りは竹やぶと雑木林に囲まれ、騒いでも大丈夫という場所で子どもさんを助けようということを始められているのですが、その親御さんも弱っているということが分かり、バックヤードである親御さんを助けたいと子どもにもいい環境を整えられないのだとも分かりました。そういうご家庭で育つ子どもさんは、ロールモデルと言いますか、お手本となるべきお父さんの姿をあまり見えていないので、地域のおじ様たち、見本となる大人が出たり入ったりしてくださっているのを、ありがたく思っています。

あと、震災のことですが、私は「市民セクターよこはま」というNPOの理事長も務めています。そこでは4月から「くらしまちづくりネットワーク横

浜」というチームを組みまして、毎月1回、岩手県大槌町に行っています。ネットワークにいるのは、水上バイクを使用してレスキューなど海を守る活動をしているウォータリースクマネジメント協会や、サッカーサポーターとスポーツを通して地域コミュニティへの貢献をしているハマトラ、他にもはりきゅう・マツサージの団体とか、自動車ごと行つて支援に入っている横浜移動サービス協議会など、ほとんどが専門的な団体です。大槌町は町長も社協の会長も会議中に同時に津波に襲われてしまつた町で、コミュニティを再生するにはどういう支援をしたいのかを考え、最初は避難所での炊き出しや足湯をしました。

そのうち避難所を出て仮設住宅に行かなくてはいけない段階になったときに「続けて来てよ」と言われ、8月からは和野橋の仮設住宅へ通っています。昨日も現地のおばあ様から「あなた、12月来なかつたじゃないよ」と電話がありました。「身内の病気が重かつたので、行かれました」と言ったら、「今度はお来るんだらうね」と。それで「はい、行きます」と。

最初は何しに来たのというよな扱いだつたのが、「おいで」という言葉をいただけで、よそ者によるゆるやかな支援というのはありだと実感しています。

就労の前提となる「生活支援」

○岩本 私の所属するK2インターナショナルグループは、磯子区、中区を中心に活動しており、設立から24年になります。10代の子どもたち、それも学校の中、クラスの中に1人いるかいないかというような、学校の中や集団の中、地域の中でなじみにくい子どもたちには何かできないかということでした。

図1 わくわく竹村の丘



中野 しずよ
特定非営利活動法人ワーカーズわくわく理事長

そういう子どもたちが学校に行かないのであれば、弱さを克服するのではなくて、弱さを逆に強みにしていくことはできないかということもいつも考えています。不登校の子を学校に戻すというのではなくて、生きていくための力をつけようということ、設立当初から、「働く」ということを念頭に置いて活動してきました。就労の場として、根岸駅の目の前にあるお好み焼き屋を20年前にオープンしました。その時は10代の子も、いつかは働かなければいけないし、経済的な自立を果たさなければ精神的にも自立していけないと考え、現在はお好み焼き屋3店舗をはじめ、色々な就労の場を作っています。

若者の就労問題といったときに、単に仕事を与えたり、仕事ができるようにスキルを身につけさせたりしても、根本的な解決にはならないと思います。生活という根本にある部分を支援しなければいけない。その人全部、その家族に至るまで、そのすべてを見て、包括的に支援することで、働き続けることができる。

結果として、お好み焼き屋を営業したり、共同生活をしたり、子育て支援や学童をしたり、福祉的な事業をしたり、「にこまる食堂」という食堂を営業したり、いろいろなことを

しています。何屋だろうという感じですが、戦略的に実施したことは一つもなく、子どもたち一人一人を見ていく中で、必要なものは何だろうということも考えながら、その子のために、これがないから作ろうと実施してきたことばかりです。

震災関係では、石巻に生活拠点を立てて活動しています。

K2の元スタッフが石巻の出身で、石巻に戻って仕事をしていて被災しまして、家も仕事も失つて、避難所生活をしていました。そこにまずは皆で行って、お好み焼きやたこ焼きを焼いたりしました。カップラーメンしか食べていなかった当時に焼いて温かいものを皆に食べてもらって、本当に喜んでもらいました。そこで私たちが連れていった子どもたちの目の色が変わって帰ってきたという経験をしました。おぜん立てされたボランティアではなく、本当に「ありがとう」と言ってもらった経験をしまして、これは続けていかなければいけないという思いで半被災したような家を買って拠点を作りました。今そこに近くの人も集まってきて、仕事をしたり、お茶会をしたり、交流会をしたりということをしていきます。横浜市の事業として実施している「よこはま型若者自立塾ジョブキャンプ」という体験型の就労支援プログラムの中でも石巻に行かせていた

だいており、定期的に行っています。行くだけでなくて、市役所でも物産展をさせていたただいて、石巻でとれたいろいろな地の物を使ってお弁当をつくったり、物産品を売ったりして、その販売を若者たちがするというところで、今まで2回ほどやらせていただいています。

つながりの地域差

○深川 専門は薬剤師で、入庁から17年間は食品衛生や環境衛生の仕事をしてきました。平成16年4月に鶴見区の高齢者支援担当の係長になり、初めて福祉分野に入りました。鶴見は下町的なコミュニティがまだまだあるところでしたが、そこで「地域差」というのを目の当たりにしました。

ひとり暮らしの高齢者の方々が区役所に相談に来られるのですが、下町の方では、認知症で「要介護3」でも地域のサポートがあり、ひとり暮らしができてしまうところもあります。片やつながりの少ない別の地域では「要支援」段階でもすぐに生活ができなくなったりする。

次に、18年に瀬谷区に異動しまして、地域福祉保健計画の推進に携わりました。16年5月に第1期の市計画を、その後各区の計画は2年間をかけ18年3月までに策定されま

した。私が瀬谷区に異動したのは計画推進の1年目で、地域のコミュニティづくりとか、地域にある資源をつないでいく仕事に携わりました。瀬谷区の場合は、地域の皆さんと一緒に計画を推進していくと、全市に先駆けて、区の全体計画だけではなく連合町内会単位で地区別計画を作りました。

その計画の推進を後押ししているこうと区の中に「地区支援チーム」を作り、福祉保健センターの職員全員が参加しました。このような仕組みも瀬谷区が最初です。

現在は横浜市全体の地域福祉保健計画の総合調整を行うポジションです。計画は5年で見直しをすることになっていて、市計画は21年度から新しい計画になっています。区計画は昨年度までに全区で第2期計画が策定されました。第2期では、すべての区で、地区別の計画と地区支援チームができあがりました。

1 つながりの希薄化とその背景

○横山 つながりの希薄化ということが言われていますが、実感として横浜の状況がどうなのか、活動をしていらっしゃる立場からご紹介をお願いします。



深川 敦子
横浜市健康福祉局福祉保健課長



岩本 真実
株式会社K2インターナショナル
株主
湘南・横浜サポートステーション統括コーディネーター
(横浜市子ども・若者支援協議会若者自立支援部会委員)

血縁が切れても生まれる別の絆

○中野 高度経済成長のとき

に地方から出てきて、建設関係などに携わったまま高齢になつて、帰るべき家がないわけではないけれども帰れないひと暮らしの方たちと出会つたことが数多くありました。そういう方々の看取りを自宅でしたのですが、連絡先を探して、「間もなくお旅立ちです」とか「重大な手術が今から始まるのですが」という電話をされると、「えっ、生きてたのか」とか「そっ

ちで好きにやってくれ」と言われたりします。そういう意味では、血縁関係からは無縁になつてたかもしれないけれども、この町で暮らす中で別の絆は生まれていたと思いますので、本当に孤独なままお旅立ちになつたわけではないということも含めて

来てくるものなので、一番のストレスの解消の仕方とは人とつき合えないことなのです。そう考えると、引きこもりも効果が確実に期待できるストレス解消法です。それを「いいんだよ、学校行かなくても。不登校がなせいけないの？」と後押しをしているのが、今の社会の風潮だと思います。ただ、不登校のままだと本人の心が満たされない部分が残る。血縁は切れてもほかの絆を求めていく、「切れてもまた生まれるのが絆」という中野さんがおっしゃったのはすばらしい言葉です。それが人間の本能なのだけど、社会がそれを理論でフォローできていると、ストレスはどんどん解消しましょうと。本当に必要なのはストレスと上手につき合えるようになるための支援です。

ストレスでもある絆ということのと、きちんと向き合うことの大切さを教えてくれたのが震災だと思います。田舎から皆、逃げるように出てきた。仕事がないということもあったかもしれないし、気持ちの上で逃げてきたかもしれないが、完全に縁が切れるとすごくさみしい。やはり田舎に帰ろう、おじいちゃん・おばあちゃんに会おうというように、また価値観が変わつてきているのではないかと見えています。

人間関係の煩わしさを味わうことが必要

○岩本 関係性を絶つという

ことを社会が認めてしまつていくというところは私の実感としてあります。以前は登校拒否とか不登校ということが問題だとされていて、それは本人たちにとってはある種のストレスではあるのだけれども、その状態ではいけないという後押しがなくて、出たいものも出られない。あるときから、学校は行かなくてもいい、引きこもる権利がある、みたいなことが言われ始めて、10年、20年と引きこもつた子がいるわけです。でも、その20年を、30歳になつてから取り戻せといつても、30歳

の取り戻し方ができない。ネット社会は引きこもらせる一つの要因になっていきます。ネットを使うというつながりの持ち方は、私たちのところにいる若者たちにとっては余りいいつながりではありません。家でインターネットをしながら、バーチャルなつながりがあることによつて、つながっていると勘違いして出てこない若者たちが多いのです。そして、思考しないことに慣れてしまっています。昔の引きこもりというイメージからすると、悩んで悩んで、考えて、生きるとは何なのかと考えているのではないかと、大人たちは考えると思います。ところが、

悪い言い方をしますが、今の引きこもりの子は考えていません。今の社会では、考えなくても5年、10年という単位を普通に過ごせるのです。そのことを大人や社会が認識していないということが危険だと思います。いろいろなことにぶち当たるとか、関係性を再構築するということはずごく大事です。そのためには、人との関係性とか煩わしさを味わわなければいけないと思います。

あと、私たちのところにいる子どもたちは、血縁や地縁を絶つてきている子が多いのですが、日本では血縁・地縁を絶つても会社で縁を作つてきた社縁の社会であつたと思います。以前であれば、高校を卒業してどこかの会社に滑り込んで、仕事は遅いけれども真面目だと、子どもみたいに育ててもらつてということがあつたと思いますが、今は企業にその余裕がない。定時制高校の支援に行つていますが、卒業するときに就職する子は1割もいません。新卒で会社に入れないと、どこともつながりを持たないで社会に放り出されてしまう。その時までに、どういふつながりを作つていくのかというのが大きな課題です。

根底にある「関係性の喪失」

○岩室 今、岩本さんが「思



司会

横山 日出夫
横浜市政策局政策部長

「考しない」とおっしゃったのですが、社会全体が、なぜ引きこもりが起きているかを考えるのを放棄してはいないでしょうか。親が悪いからとか誰かの責任にして、本質を考えることを放棄してきましたが、私は根底にあるのは「関係性の喪失」だと思っています。若者たちの生活環境から、近所の人など日常的にコミュニケーションをとれる関係にある人が減っている、コミュニケーション能力が養われない。「関係性の喪失」については、ここにいらっしゃる皆さんは実感されてきたことだと思います。そろそろ真剣に日本のため、横浜のために、関係性の再構築を考えなければいけない、考えていい時期になったのかもかもしれません。

○中野 瀬谷区にワンデーポートという、ギャンブル依存症からの回復プログラムを持ったNPOがありまして、その方々の就労支援をしています。最初はボランティアで来てもらって、大丈夫そうだったら非常勤雇用を行います。ボランティアはたくさん受け入れているのですが、雇用契約を結んでいるのは3名になります。

その人たちがボランティアに来たときは、「なんちゃって実家」のお兄さん役というのでしようか、子どもがまとわりつく、肩車やおんぶをされたが、あぐらをかいていると子ども

争いがあつて採択されなかったようですが、いずれ復活するだろうと言われています。「スピリチュアル」というのは、感動や自己肯定感です。先ほど中野さんが体を動かした方がいいとおっしゃったのですが、体を動かすだけでなく、そこで「苦労さま」と言われたと。それは感動ですよ。我々がそのスピリチュアルなものをどこで得ているかという、誰かとつながっている中でもらっている。私は高校生に講演して、その後メールが来ると、認められた気持ちになって、自己肯定感が高まっていくという感覚をいただけるので健康でいられるようです。

もう一つ大事なことは「ダイナミック」です。これは毎日ということなのです。1カ月に1回、体を動かしてもだめですよ。毎日やり続ける中で、毎日ありがとうと言われたとか、毎日汗をかいたとか、そういう爽快感から健康になっていく。

○岩室 1948年のWHOの健康の定義では、身体的・精神的・社会的健康が言われていますが、99年に2つの言葉を加えようという話になりました。「スピリチュアル」と「ダイナミック」です。日本や欧

米と、提案側のイスラム圏との

争いという方が対極かと思えますが、後者が70%と、非常に多くなっています。このデータは経年的にとっているのですが、昭和55年と比べると20ポイントくらい増加しています(表1)。逆に親密な人間関係があつて暮らしやすいという方は11・7%です。

ただ、別の調査結果として、近所づき合いに前向きな回答が少しですが、23年に17%に上がりました(表2)。これは昭和50年以來、初めてのことで、23年は震災後の調査ですが、横浜市の中でも人との関係性についての感覚が変わってきている兆しがあります。今後どうなっていくかは分かりませんが、

高年齢担当係長としての経験から言うと、ずっと一人で暮らしてきた方でも、最期は人との関係を求めるのだという実感があります。ずっと一人で暮らし、家族とは一切連絡を取っていない方が亡くなる直前に、「○○に会いたい」とか、「連絡をとりたい」とか言われたり、ご近所の方がお見舞いに来

てくれたりすると、本当にうれしそう顔をされたり、そのような方が何人もいらっしや

表2 隣近所との付き合い方 (平成23年度横浜市民意識調査)

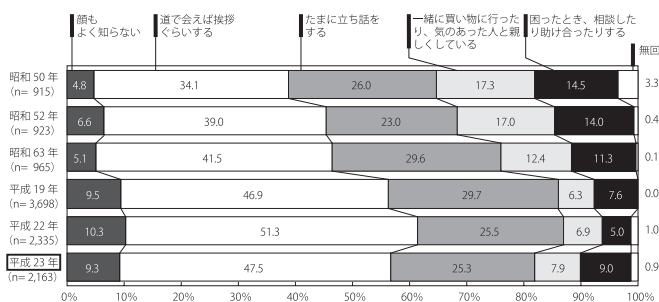
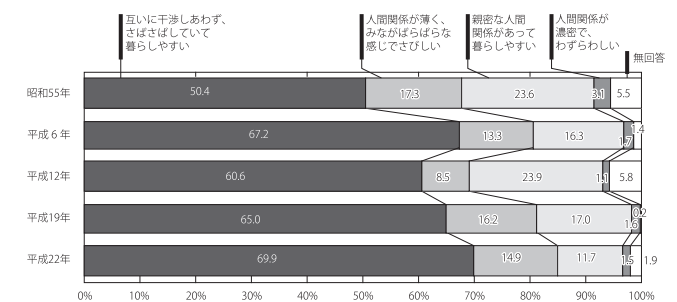


表1 隣近所との付き合いの感じ方 (平成22年度横浜市民意識調査)



いました。

2 つながりの作り方、政策としてのつながり作り

○横山 最後に、つながりをどう構築していったらいいか、ご意見をお願いします。行政としてできることについてもご示唆をいただけるとありがたいです。

「新しい絆」作りに必要な「つながる理由」

○岩本 地縁・血縁・社縁に代わる「新しい絆」を作っていくかなければいけないというのが、ここ何年かのテーマとしてあります。それは、前よりもちょっと意識してご近所とおつき合いをしましょうというようなことでは実現しないと思います。

私たちの強みというのは、弱さを持っている者同士が集まることによつて、それを力にしていくなことだと思つています。そこにはつながる理由があるのです。何か二つの意味を持つてつながることがなければ、何となく皆つながつていこうということでは状況は変えられないのではないかと。震災後、原発の問題もあつて、日本は本当に危機的な状況にあると思います。K2にいる若者たちはまだ実感として感じていません。でもその危機感を、あえて言

えば一番弱い立場にいる若者たちがどう感じ、どう変われるかというのが今、試されていると思います。

新しい絆の持ち方について私たちはあえて煩わしいくらいに強くつながることの方が大事と思つています。私たちは共同生活をずつとしていますが、すごく煩わしいですし、人からは「よくやりますね」と言われます。でもこの時代のこの状況になると、むしろ一緒に住んでしまふということは、強みだと思つています。というのは、困つて

いる人の話を週一回聞いて、アドバイスしてあげるというようなやり方には限界を感じているのです。だから一緒に住む、というのは極端だと思われるかもしれないませんが、もう少し深掘りはしていかなければいけないと思つています。

その二つが同じ課題を持った者同士がお互いに助け合う関係を作つて、支援する側・される側でなくて、互いに助け合う中から新しいものを作つていくというようにつながり方が大事だと思つています。私たちが言えば元利用者がスタッフとなつているチームがあるのですが、その力はとても大きいです。同じ痛みを持つてやつてきた若者たちが、恩送り、英語で言うところの pay it forward をしてこそ自立だと思つていますが、その恩送りというつなが

りの強さを感じています。

あとは私たちの支援している若者たちの親御さんのつながりです。親御さんも自分の子どもが30歳で自分は年金暮らしという状況で、自分の老後や子どもの将来に不安を感じていますが、その人たち同士がつながつて、若者たちを支援していこうという動きがあります。そういうものが大きな力になつていくと思つています。

行政への要望ということに関して言いますと、私は先日、別の分野の団体の更生保護施設を見に行きました。民間と国営の取り組みがあり、どちらも先進的な団体でしたが、人とかかわる仕事で国ができることの限界というのを感じました。すべての人に対して同意を得なければいけなかったりとか、地域の人に対しての配慮とか、規則が制約になつていたり、国営施設の難しさを感じました。

一方で、民間の団体は、まずやつて、後から仕組みを作つていくというスピード感とか、人との近さという部分で強みがあります。今、行政との連携も私たちの中でポリユームが大きくなつている中で、私たちはあくまでも民間としてやることをやらねばならないということを、改めて感じました。行政には私たちの自由さとか、発想とか、スピードとかを後押し

していただくということが大事だと思つています。

顔見知りの関係を作る仕掛け

○中野 つながりの作り方ということですが、以前はおせつかいおばさんがいて、仲間もしたでしょうし、人と人をつなげたりしていたと思つています。今そういうおせつかいおばさんが少ないとしたら、人為的に仕掛けを作るしかないということ、見知らぬ人が顔見知りの関係になる場として、サロンを始めます。電車の中で席を譲るのも、知らない人に声をかけるのは勇気がいるのですが、知り合いであれば、「私、次の駅で降りるから座らないか？」と言つて、簡単に席が譲れます。見知らぬ人が顔見知りになつてしまえば、つながりができて、距離が縮まる。それは別に血縁関係でもないのが気安く別れられる。そういう顔見知りの関係づくりは仕掛けていかなければいけないと思つています。

もう一つ、会社に対しての帰属意識が薄れてしまう社会では、「共同作業」も仕掛けなければいけないと思つています。人の幸せは、愛されることとか、人の役に立つこととか、人から喜ばれることだと思つていますけれど、共同作業の場では、「あの人はのんびり屋かと思つたら、

最後の最後までお片づけしていたわ」とか、「みんなが帰った後でトイレ掃除まで済ませてくれたのは、あの人がだったわ」とか、チームの中で思いがけないところで能力発揮ができたりするるので、人から愛されたり、喜ばれたりする場が持てるようになるのです。岩本さんのところの「にこまる食堂」では共同作業を意識的に仕掛けていきますけれど、動いた人が喜びを自分でつかみとっていきけるような場を仕掛けていった方がいい。

その仕掛けのところでは黒子として行政の力は借りたいと思っています。NPOはゲリラで、正規軍が行政だとしたら、ゲリラは匍匐前進しながら草の陰とかに「あ、ここにこんな困っている人がいる」と見つけるのも得意だし、ひとまずこの人のことを支援すれば、この手法でほかの人のこともできると広がっていったりはするのですが、やはり正規軍は大きく見ているのでその違いはあります。どちらがいいとかではなく、両方特色だと思っているので、力を合わせてできる横浜市の協働の仕組みはあります。

それから具体的な取り組みとしては、町の中に空き家開放や縁側開放をしようか。私たちが人のおうちに行つて、「おたくの縁側を開放してください」とか、「おたくのリビングを開放してください」と言うのと、「何者？」となるけれども、例えば行政が仲立ちになって、まず行政が借り上げて、使用ルールをつくった上で法人と連携して実施する。小布施のオーブンガーデン（注1）では、お庭を開放して、勝手にお入りくださいとやっているうちにリピーターが増えたり、リピーターが来るからお茶を出そうということになったり、お茶だけでは悪いからケーキをつくって出しちゃおうとかとなって、町じゅう出入りが自由になっていく。仕掛けはちよつとのお宅のパワーとか良識とかが力になつていきます。

このごろたまに講演するので、座学だけでなく、参加型で自分たちの町をどうしたいかというレッスンをしていた方がいいです。参加した方に問題意識と課題解決を考えてもらうと、後でOB会ができたリ、知らないうちに動いているのです。びつくりしたのは金沢区で、何年か前に呼んでいただいて話をしたら、去年、NPOを立ち上げ、事業所を立ち上げましたというご案内をいただきました。こうなると、おせつかいおばさんを超越して「花咲かばばあ」にもならなければいけないのだと思いましたが、そんな花咲かばばあが地域に

たくさんいたら、人が生き生きするのではないかと。そのときに行政も、指導するのではなくて一緒に考えていく。ヨコハマ市民まち普請事業は、一緒に町の人と行政とで町をつくっていくいい企画ですね。ああいう支援を、まだどう動いていいかわからない草の根さんたちにもつなげていく。広い視野でのアドバイスを下さるとありがたいです。

ポピュレーションアプローチで取り組むつながり作り

○岩室 私はずっと行政にいた人間として、横浜市にはぜひ協働のモデルをつくるだけではなく、きちんとその成果を評価していただきたい。何を評価していただきたいかというところ、ハイリスタアプローチとポピュレーションアプローチ（注2）のうちポピュレーションアプローチの部分です。ハイリスタな人たちがいるのは、不登校だったり、困難を抱えていたり、非常に「分かりやすい」。ハイリスタな方々に対するさまざまなアプローチというのは今まで行政がやってこられて、社会も関心を持ってきたと思います。逆に言うと、ハイリスタ対応しかしてこなかった。ところが、その人たちだけにアプローチしても全体として良くならないというの、健康づくり分野での

取り組みから明らかになっています。メタボの人たちに対して特定保健指導をいくらやっても事態は改善しません。健康づくりの分野で唯一成功しているのは、80歳で20本の歯を残そうという8020運動です。なぜ成功したのか。健診でハイリスタな人たちを見つけ、対応するといったことは行われてきませんでした。一方で皆さんのブラッシング回数は、前は1回だったのに2回、3回になった。これはいろいろな人が見せてくれたから。いろいろなつながりの中で学ぶ機会があったから。そういうつながりがないことがリスクなのです。先ほどからずっと話題になっている関係性の喪失というのも社会に蔓延するリスクであつて、これにポピュレーションアプローチで立ち向かつて、孤立した人を個別に支援するのではなく、すべての人が多様な関係性を持つる社会環境を意識して予防的に作らないと、根本的な解決にはつながらないのです。

ですから行政はまず、社会に蔓延しているリスクは何なのかをきちんと検証し市民に伝えてください。あなたは今は困難を抱えていないかもしれないけれども、あなたに「面倒くさいよ、近所づきあい」というリスクがありませんかと。あなたはそれでもいろいろなこととで乗り越えられるかもしれ

（注1）小布施のオーブンガーデン
2000年に開始されたオーブンガーデン運動では、参加する家が入り口に「Welcome to My Garden（私の庭へようこそ）」という案内板を掲げ、観光客は自由に庭園内を歩いて鑑賞することができている。

（注2）ポピュレーションアプローチ（集団アプローチ）
ハイリスタを持った個人に対する支援を行う「ハイリスタアプローチ」に加え、集団全体に広く分布するリスクに予防的に働きかけ、総体としての課題減少を図るために必要不可欠とされている主に疫学で使われる概念。

ないけれど、お子さんは人と接していないからもしかしたら後で困難を抱えることになるかもしれない、という「脅し」みたいなことを、ぜひしていただきたいのです。

岩本さんのところでは、共同生活というを通して、つながりというものを利用者の方に体験させています。「関係性の喪失」を克服している仕事なので、すよと指摘して、報告書などにも横浜市が目指している「関係性の再構築」に大いに寄与していると書いてください。ねという指導まですべきだと私は思います。そういう「理屈」をきちんとつけてあげるのが、まず行政側の大きな役割だと思っています。

それから、先ほど発達障害という言葉が出たのですが、発達障害を抱えた人たちでも立ち直っているのは、関係性に学べた時なのです。スピリチュアルなことをダイナミックに経験することが大切です。毎週相談に来て、だめだと岩本さんはおっしゃった。なぜ毎週ではないのか、毎日ではないからです。毎日かわる。それも朝昼晩かわる。社縁が重要なのは朝昼晩かわる場だからなのです。社縁が必要ということではありません。朝昼晩かわつてくれる人が、環境が必要なのです。それを作る力が社縁にはある。企業に

そういうことを意識していただけるようにするのも行政の仕事です。

うまくいつているところは関係性の喪失という社会に蔓延するリスクに対して丁寧なアプローチしようとしています。それを意識して、例えば横浜市すべての事業の冠、副題に、これから10年、必ず「絆」という言葉をつけるようにする。横浜市は中期計画の中で、つながりでしか社会は動けないということを1年前に言っているの、このことをもつといろいろな場面で手をかえ、品をかえ、言い続けていくしかありません。市民にも分かりやすい言葉で「理屈」を伝えることをこれから行政の大きな役割とすべきです。それを行政が丁寧に行き続けられれば、必ず「やっぱり絆が大事だよ」となる。その取り組みの評価は簡単です。毎年意識調査をしていらっしやるわけですから、そういうところで数字をとり続けて、取り組みを続けていけば、横浜市民は絆を意識するように変われると思います。だから自信を持って評価し続け、仕掛け続けていただきたい。

評価者、翻訳者としての行政

○深川 先ほど地域福祉保健計画の話を見せていただきましたが、私たちもある程度やって

きたのではないかという思いはあります。例えば先ほどサロンのお話がありました。瀬谷区で第1期計画を推進していく中で、顔見知りになる関係を作っていく仕掛けとして、地域の方たちの交流の場としてサロンをつくっていくということがあり、実際にたくさんできています。

ただ、一緒に取り組む相手としては、いわゆる自治会町内会であるとか、今まであった地縁の絆の強いところから生まれてきている団体が多くなっています。今、もう一歩先に進めるときには、そのような地縁団体と、NPOやさまざまな活動をしている団体とをどうつないでいくのか。岩本さんや中野さんたちの活動を、地域の人たちの一つの財産として地域の中に広げていって、さらに活動を広げていく。そのあたりをゆるやかなつながりの中で実践できていくといいのだろうと思っています。岩室先生がおっしゃったように、皆さんの活動をきちんと評価し、受け止めるながら、それをどう翻訳しているいろいろな方につないでいくか。潜在的な力は皆さんお持ちですから、地域の力と行政の力をどうあわせていくかということとともに、きちんと評価をして、今後どう仕組みとして組んでいくか、そこが行政として大事な仕事なのだろう

と思います。

地域福祉保健計画で大切にしていることは2つあります。生活課題を地域の皆さんの力を結集して解決していくということと、もう一つはお互いに支え合って、絆、地域のつながりをつくり直していくという姿勢、この2つです。その「つながり」というところをもう少し広く、大きくしていかなければいけないのだと思います。

○岩室 横浜市子ども・若者支援協議会では、横浜市はもう十分活動が広がっているというか芽生えているけれど、お互い知り合っていない、そこをつなぐのが行政の役割ではないかという議論がありました。そして、もうそろそろそのつなぎ、連携のコーディネートまでも民間にお任せしましょうと。

行政が「中野さんのところ、もうちょっとつながってよ」と言うのは、民間にやらせているだけです。でも、今日私と中野さんがつながることができたように、気がついたらつながっていたというような「ゆるやかなつながり」が自然に生まれる環境作りをもつとしていただければ市民はもつと元気になる。横浜市こそ、「ゆるやかなつながり」作りを頑張ってください。

(平成24年1月6日 横浜市政策局政策支援センターにて)